

第五章 六朝期における阮籍「詠懷詩」の受容

—江淹、庾信を中心として

はじめに

阮籍（二一〇～二六三）は、当時において多くの作品を残したひとりである。現存する彼の詩作を網羅している『阮籍集校注』には五言が八十二首、四言が十三首収められている。「詠懷詩」という名の元にまとめられ、後世に大きな影響を与えた。

ここでは、六朝（南北朝）期に目を向けていく。宋、齊、梁の三朝に仕えた江淹（四四〇～五〇五）は、阮籍「詠懷詩」に倣った「效阮公詩十五首」を作っている。「阮公」とは、阮籍のことである。やや時代が下って、梁、西魏、北周の三朝に仕えた庾信（五一三～五八一）もまた「擬詠懷詩二十七首」を作る。短命の王朝が乱立する六朝期において、阮籍の詩作はしばしば模擬の対象として取り上げられた。

江淹のものは後述するように、当時仕えていた君主が謀反を図っていた劉宋末、すなわち彼がおおよそ三十才の時の作である。庾信のものは、祖国が亡び、北周に留まることがなるその晩年、おおよそ六十六歳の時の作である^二。

江淹は早くに名を顕すも^一、晩年に才能が尽きたといわれる。『詩品』巻中にこんなエピソードが見える。「淹宣城郡を罷め、遂に野寺に宿る。一美丈夫を夢む、自ら郭璞と称す。淹に謂いて曰く、吾筆有り、卿の処に在ること多年なり、以て還さるべし、と。淹懷中を探り、五色の筆を得て以て之に授く。爾る後詩を為るも、復た語を成さず、故に世に江淹は才尽くと伝う^三」とある。江淹が「宣城郡を罷め」たのは、晩年にあたる五十五歳のころ。夢に郭璞と称する美男子が現れ、懷中にあった「五色の筆」を彼に返したところ、詩文が作れなくなったという。一方、庾信について杜甫は、「老いて更に成る^四」とその晩年の作を高く評価する。江淹のものに関してはエピソードとはいえ、これに拠るならば、文学の生涯において相反する評価を持つ二人ということになるが、阮籍詩への模擬はちようどそれぞれの才が華やぐ時期に試みられている。

本章は、六朝を代表する詩人である江淹と庾信の「效阮公詩十五首」及び「擬詠懷詩二十七首」に注視し、模擬をめぐる両者の特質から見出される六朝期における阮籍「詠懷詩」の受容のあり方について考えるものである。

一、江淹「效阮公詩十五首」

「效阮公詩十五首（以下「效阮公詩」）」をめぐって、江淹が自ら撰した自家集^五の序文である「自序」に次のような一節が見える。

王鎮朱方に移るに及ぶや、又た鎮軍参軍事と為り、東海郡丞を領す。是に於いて王と不逞の徒、日夜構議し、淹禍機の將に発せんことを知る。又た詩十五首を賦す。略や性命の理を明らかにし、因りて以て諷と為す。王遂に悟らず。乃ち憑怒して之を黜く。建安吳興令と為る。

当時仕えていた劉景素が朝廷に対し謀反を企て、それを察知した江淹が彼を諫めるため「詩十五首」を作った。このため劉の怒りを買ひ、建安吳興（福建省）令に左遷されたことが記されている。「詩十五首」とは、「效阮公詩十五首」を指すとする^六が定説である。江淹が吳興令となったのは、四七四年のこと^六。二年後の四七六年に、劉景素は反乱に失敗し、刑死する。「自序」によれば、阮籍詩への模擬に取り掛かったのは、このような緊迫した時期になる。

試みに「效阮公詩」其十を挙げ、特徴を見てみよう。

| | |
|-------|---|
| 少年學擊劍 | 少年 <small>しょうねん</small> 擊劍 <small>げきけん</small> を学 <small>まな</small> び |
| 從師至幽州 | 師 <small>し</small> に從 <small>したが</small> いて幽州 <small>ゆうしゅう</small> に至 <small>いた</small> る |
| 燕趙兵馬地 | 燕趙 <small>えんちよう</small> 兵馬 <small>へいば</small> の地 <small>ち</small> |
| 唯見古時丘 | 唯 <small>ただ</small> 古時 <small>こじ</small> の丘 <small>おか</small> を見 <small>み</small> る |
| 登城望山水 | 城 <small>じよう</small> に登 <small>のぼ</small> り山水 <small>さんすい</small> を望 <small>のぞ</small> み |
| 平原獨悠悠 | 平原 <small>へいげん</small> 獨 <small>ひと</small> り悠 <small>ゆう</small> 悠 <small>ゆう</small> たり |
| 寒暑有往來 | 寒暑 <small>かんしよ</small> 往來 <small>おうらい</small> 有 <small>あ</small> り |
| 功名安可留 | 功名 <small>こうみやう</small> 安 <small>いすく</small> んぞ留 <small>とど</small> めんや |

冒頭二句は、阮籍詩其六一の冒頭「少年 擊刺を学び、妙伎 曲城に過る」を踏まえる。高いところに登り、俯瞰し得た広大な空間を「悠々」と表現する第五、六句は、阮籍詩其十七の「高きに登り九州を望む、悠悠として曠野を分つ」を下敷きとする。

無窮なる時間と儂い名声を対比させた最後二句は、阮籍詩其十五に見える「千秋万歳の後、栄名安くにか之く所あらん」を想起させるものである。「效阮公詩」における江淹の模擬はここに窺われるように、阮籍詩全体からモチーフを採り、措辞、構成を踏襲しつつ、新たな一篇として再構築している特徴がまず挙げられる。

『詩品』では江淹について、「文通〔江淹〕詩体総雑にして、摹擬に善し」と評価する。実際、残されたおおよそ半数の作品が模擬の作である⁷⁰。嚴羽は『滄浪詩話』において、「擬古は唯れ江文通最も長け、淵明に擬せば、淵明に似、康楽に擬せば康楽に似、左思に擬せば左思に似、郭璞に擬せば、郭璞に似たり⁷¹」とその模擬の巧みさを高く評価する。一方で、張玉毅は『古詩賞析』において、「〔江淹の〕效阮公詩は、平直なること多く、味少なし」と批判的に述べる。

肯定的に評価した嚴羽及び否定的に評価した張玉毅、いずれも原篇に似ているか否か、言葉を換えれば江淹の「まねる」「似せる」技量に関心を寄せている。

しかし、「效阮公詩」における模擬は、このような視角からでは捉えきれないもう一つの特徴があるように思う。「幽州」に來た「少年」は「城に登」る。高いところで目にしたのは、時間の蚕食をもともしない広大な「平原」である。儂い人間の営みを慨嘆した結びへと繋がっていく。模擬作では「曲城」が「幽州」に変わっており、また「燕趙」という新たな地名が加えられている。「幽州」と「燕趙」は、いずれも北方の地。劉景素が鎮軍將軍・南徐州刺史となったのは四七二年のこと。翌、四七三年に鎮北將軍の号が授けられる。江淹が左遷される直前、すなわち「效阮公詩」を詠んだと考えられる時期に、劉景素がついた役職である。鎮北將軍は、もとは「幽州」「燕趙」を含む北土を守る役職であった。模擬作における地名は劉景素を連想させるものとなっている。

もちろん、模擬の作は原篇と全く同じである必要はない。ただ、模擬作に詠み込まれた両方の地名は、江淹自身の状況をいくばくか投影させたものとなっているように感ずる。

「效阮公詩」十五首はほとんどが其十と同じように、あらゆる阮籍詩からモチーフをとり、一篇を構成する。これに対し、其一と其三は阮籍詩のある一篇に対する模擬である。「效阮公詩」における江淹の模擬の特徴は、この両篇においてより明瞭に現れているように思われる。其一を挙げよう。

歳暮懷感傷

さいぼ かんしやう
いだい
歳暮 感傷を懷き

中夕弄清琴

ちゆうせき
せいきん
もてあそぶ
中夕 清琴を弄ぶ

戻戻曙風急

れいれい
しよふう
きゆう
戻戻たる曙風 急に

| | |
|-------|---------------------|
| 團團明月陰 | だんだん 　めいげつ かげ |
| 孤雲出北山 | こうん 　ほくざん |
| 宿鳥驚東林 | しゆくちゆう 　とうりん 　おどろ |
| 誰謂人道廣 | た　い 　じんどう 　ひろ |
| 憂慨自相尋 | ゆうがい 　みずか 　あいたず |
| 寧知霜雪後 | いずく 　そうせつ 　あと |
| 獨見松竹心 | ひとり 　しょうちく 　こころ 　あち |

この作品は、右に述べたように特定の一首に対する模擬である。今日では、阮籍「詠懷詩」其一とされているものである。江淹が模擬を試みた当時においても、この作品が阮籍詩群の冒頭に置かれていたであろう。以下にそれを掲げる。

| | |
|-------|------------------|
| 夜中不能寐 | やちゆう 　い 　あた |
| 起坐彈鳴琴 | きざ 　めいきん 　だん |
| 薄帷鑒明月 | はくゐ 　めいげつ 　て |
| 清風吹我襟 | せいふう 　わ 　えり 　ふ |
| 孤鴻號外野 | ここう 　がいや 　さけ |
| 翔鳥鳴北林 | ひちよう 　ほくりん 　な |
| 徘徊將何見 | はいかい 　はた 　なに 　み |
| 憂思獨傷心 | ゆうし 　ひと 　こころ 　いた |

両篇を見比べてみると、寝付けない主人公、琴を弾く行為、月、風、鳥の配置、憂いの表出。同じ句の同じ位置にそれもほぼ同じ語彙を用い詠われていることに気付く。其十と比べ、より一層周到に原詩の世界が踏襲されている（巖羽が『滄浪詩話』において高く評価したのはこうした江淹の模擬の力だろうか）。

両者の違うところは、三、四句に見える景が一つとして挙げられる。阮籍詩に描かれた「風」と「月」は、穏やかで静謐である。そのためか、前後描出された夜寝付けない主人公の様相、暗闇に響く鳥の声は、ひととき異質のものとして浮かんでくる。これに対し江淹詩では、「風」と「月」は「急」、「陰」と形容され、その穏やかならざる様子は、作品全体の雰囲気に沿っている。いささかアンバランスな破たんによって覚える阮籍詩の鮮やかな印象は、江淹詩からは齎されない（張玉穀が『古詩賞析』において、「平直なること多く、味少なし」と述べたのは、あるいはこうした違いを

指すのだろ(う)か。

そして更に気付くことは、江淹詩は対象への緻密な模擬を試みながらも、それだけでは完結しないことである。原篇にない二句が最後に足されている。「寧んぞ知らん霜雪の後、独り松竹の心見わるを」と『論語』を踏まえ、君子の生き方を称えたものである^九。このように見るならば、江淹の模擬作は二つの部分から構成されているということになる。原篇への模擬の部分と、そのあとに追加した部分である。

鮑照(四一二〜四六六)も「詠懷詩」其一に模擬した作品を残している。「阮公の夜中寐ぬる能わずに擬する」である。「夜中寐ぬる能わず」はいうまでもなく、阮籍詩其一の起句である。

| | |
|-------|--------------|
| 漏分不能臥 | 漏分〔夜半〕臥する能わず |
| 酌酒亂繁憂 | 酒を酌み繁憂乱る |
| 惠氣憑夜清 | 恵氣夜清に憑り |
| 素景緣隙流 | 素景隙流に縁る |
| 鳴鶴時一聞 | 鳴鶴時に一たび聞こえ |
| 千里絶無儔 | 千里絶えて儔無し |
| 佇立為誰久 | 佇立誰が為に久しせん |
| 寂寞空自愁 | 寂寞空しく自ら愁う |

原篇では「琴」だったところが、鮑照の模擬作では「酒」に変わっているなど、モチーフ、措辞のみを見るならば、江淹のものほど忠実に再現をしていない。しかし、鮑照の模擬は、原篇の枠組みに沿って行われている。

同じ対象、そして同じ模擬という行為を通して生み出された両方の作品であるが、より周到に原篇への再現を試みている江淹詩のほうに、殊更二句が加わっていることは、一際目を引くものがあり、無意識の所為ではないように思われる。

右に見た「效阮公詩」における特質は、もう一篇の其三にも現れている。

| | |
|-------|--------------|
| 白露淹庭樹 | 白露庭樹を淹い |
| 秋風吹羅衣 | 秋風羅衣を吹く |
| 忠信主不合 | 忠信主として合わず |
| 辭意將訴誰 | 辭意將に誰にか訴えんとす |
| 獨坐東軒下 | 獨り坐す東軒の下 |
| 雞鳴夜已晞 | 雞鳴きて夜已に晞く |

總駕命賓僕 駕を総べ賓僕に命じ
遵路起旋歸 路に遵い起ちて旋帰せん
天命誰能見 天命誰か能く見ん
人蹤信可疑 人蹤 信に疑うべし

つゆは朝方、葉に降りてくるもの。季節は秋。秋の夜明け前後のわずかな時間がここに切り取られているが、夜通し寝付くことのできなかつた主人公の孤独な姿がその背後に想像される。暗闇の中、悩みを抱えた主人公は、「路に遵い起ちて旋帰せん」とあたりが明るくなるにつれ、意にそぐわない現状から腰をあげ、行動をおこそうとする。最後の二句を残し、第八句までは次に挙げる阮籍詩其十四『文選』では其七の内容をそのまま踏襲する。

| | |
|-------|----------------|
| 開秋兆涼氣 | 開秋 涼氣を兆し |
| 蟋蟀鳴牀帷 | 蟋蟀 牀帷に鳴く |
| 感物懷殷憂 | 物に感じて殷憂を懷き |
| 悄悄令心悲 | 悄悄として心をして悲しましむ |
| 多言焉所告 | 多言 焉んぞ告ぐる所あらん |
| 繁辭將訴誰 | 繁辭 將誰にか訴えん |
| 微風吹羅袂 | 微風 羅袂を吹き |
| 明月耀清暉 | 明月 清暉を耀かす |
| 晨雞鳴高樹 | 晨雞 高樹に鳴き |
| 命駕起旋歸 | 駕を命じ起ちて旋帰せん |

秋の夜明け前、憂いを抱え、物思いにふける主人公。分かち合う相手いないゆえ生じる孤独感と閉塞感。そうした負の感情は、夜明けとともに、「起ちて旋帰せん」と前向きな行動によって払拭される結び。措辞、構成に多少の相違は見られるものの、江淹詩第八句までに描き出された世界は、ここに挙げた阮籍詩とびたり重なる。

しかし、「效阮公詩」における模擬は、ここでもやはり完結せず、其一と同じように末尾に「天命 誰か能く見ん、人蹤 信に疑うべし」と、天命、人事の測りがたきことへの感慨を加える。阮籍「詠懷詩」の内容・表現に倣う趣向は見取られるものの、「效阮公詩」における江淹の模擬は、そのみに関心が置かれていないことが、付け足された二句から窺われるように思う。

「效阮公詩」における模擬のこのような特質を考えると、前掲「自序」の「略や

性命の理を明らかにし、因りて以て諷と為す」という一文が想起される。不穏な時代を肌で感じた江淹が、自らの立場、思いを詠出するとき、阮籍の文学に擬えるという婉曲なスタイルをとったのだと^十。

「自序」において、自らが歴した官職の紹介が「正員散騎侍郎、中書侍郎に遷る」で終わる。彼が三十六歳、四七九年前に就いた役職である。劉景素が反乱に失敗し、刑死されたあとに執筆されたことになる。あとから語られる「效阮公詩」の意義を鵜呑みにすることには慎重でありたいが、緊迫した時代に生き、なんらかの思い、感慨を抱えるのは不思議なことではない。模擬作其一で付け足された「寧んぞ知らん霜雪の後、独り松竹の心見わるを」、其三「天命誰か能く見ん、人蹤信に疑うべし」はいずれも、「自序」でいうところの「性命の理」に関連する内容となっている。「自序」で述べたことは、作品そのものの構成、または内容によって示されることになる。「效阮公詩」における模擬は、対象の再現を越えて、江淹自身の思い、感慨を表出する場としての側面を持っていたといえよう。

二、庾信「擬詠懷詩二十七首」

庾信の人生は北遷を境に、二分される。前半は南朝お抱えの文人として、きらびやかで艶めかしい作品を多く残している。後半は北周に留められ、南朝以上の地位に着くも、自らの生き方について思索する日々が続いた。やがて祖国である梁が滅び、ついには南帰することが叶わなかった。五八一年、庾信が亡くなる直前、北周もまた隋に取って代わられる。

「老いて更に成る」と称えられた晩年の作に、「哀江南賦」がある。彼の代表作である。かつて仕えていた江南を回顧し、滅びたことに対する嘆きがつづられている^{十一}。そして、もう一つの大作が、ここに取り上げる「擬詠懷詩二十七首（以下「擬詠懷詩」）」である。詠出された思いは「哀江南賦」と共通する。その第一首を挙げよう。

| | |
|-------|--------------|
| 歩兵未飲酒 | 歩兵未だ飲酒せず〔阮籍〕 |
| 中散未彈琴 | 中散未だ彈琴せず〔嵇康〕 |
| 索索無眞氣 | 索索として眞なる氣無し |
| 昏昏有俗心 | 昏昏として俗なる心有り |
| 涸鮒常思水 | 涸鮒は常に水を思い |

| | |
|-------|-------------------|
| 驚飛每失林 | 驚飛は毎に林を失う |
| 風雲能變色 | 風雲能く色を変え |
| 松竹且悲吟 | 松竹且つ悲吟す |
| 由來不得意 | 由来意を得ず |
| 何必往長岑 | 何ぞ必ずしも長岑に往かんや〔崔駟〕 |

阮籍と嵇康の生き方は、しばしば酒と琴によつて象徴される。しかしここではそのいづれも、していないと詠む。「涸鮒」は『莊子』、「驚飛」は『戦国策』に見える物語を踏まえる^{十二}。生き物は自分が属する環境にいてはじめて安心するという摂理を述べる。最後は、『後漢書』に見える崔駟のエピソードを引く^{十三}。長岑を遠いからといって職を去り、彼は故郷に帰つたという。それに比べ、わたしは年老いてなお、異郷に留まつたままである。時代の荒波に逆らえず、流れついた先での生活に甘んじ生きる無念さが、阮籍、嵇康、崔駟の描き方をおして浮かび上がってくる。

連作第一首のそれも冒頭に、阮籍（步兵）の名が見える。「詠懷」と名付けられた作品は、阮籍以降多く作られるが、庾信が意識したのは、他ではなく阮籍のそれであることを暗にほめかしているようである。しかし作品そのものは、語彙、モチーフ、構成のいづれをとつてみても阮籍「詠懷詩」を喚起する要素は見当たらない。

もう一首「擬詠懷詩」其二十四を挙げよう。ここに見える「東陵侯」は、阮籍の作品によく登場する人物であり、いささか阮籍詩を連想させる。

| | |
|-------|---------------|
| 無悶無不悶 | 悶え無くも悶えざる無し |
| 有待何可待 | 待つ有るも何ぞ待つべけんや |
| 昏昏如坐霧 | 昏昏として霧に座すが如く |
| 漫漫疑行海 | 漫漫として海を行くかと疑う |
| 千年水未清 | 千年水未だ清まず |
| 一代人先改 | 一代人先に改む |
| 昔日東陵侯 | 昔日の東陵侯 |
| 唯有瓜園在 | 唯瓜園在る有るのみ |

感情は色褪せ、生きがいを見失い、何も見出せない時間、空間をさまよう様子が詠われる。「東陵侯」とは、召平のこと。秦の時、東陵侯という貴い身分であったが、秦が敗れると庶民となり瓜を植えた。その瓜は素晴らしく、「東陵瓜」と呼ばれた^{十四}。『史記』に見えるエピソードである。このエピソードを踏まえ、しかし今となつては

「東陵侯」は亡くなり、空しくその「瓜園」が残されているのみである、と結ぶ。人間の儚さが印象付けられる。

阮籍詩を挙げよう。

| | |
|-------|------------|
| 昔聞東陵瓜 | 昔聞けり東陵の瓜 |
| 近在青門外 | 近く青門の外に在り |
| 連畛距阡陌 | 畛に連なり阡陌に距り |
| 子母相鈎帶 | 子母相鈎帶す |
| 五色曜朝日 | 五色朝日に曜き |
| 嘉賓四面會 | 嘉賓四面より会すと |
| 膏火自煎熬 | 膏火自ら煎熬し |
| 多財爲患害 | 多財患害と爲る |
| 布衣可終身 | 布衣もて身を終うべし |
| 寵祿豈足賴 | 寵祿豈頼むに足らんや |

(阮籍「詠懷詩」其六、『文選』では其九)

冒頭六句は、東陵侯逸話を踏まえる。続く四句において、「多財」を「患害」とみなし、慎ましく生きる「布衣」にこころを傾ける。瓜畑を耕し生業とした「東陵侯」は、理想的に生きた人物として詠われている。

阮籍詩其六十六においても、「瓜」を持って東陵を思い、黄雀誠に独り羞ぶ」と「東陵(侯)」と「瓜」を引き合いに、理想な生き方を思索する。また、阮籍の「大人先生伝」という伝記形式の作品においても、「召平 東陵に封ぜらるも、一旦 布衣と為る。枝葉 根柢に托し、死生 盛衰と同じくす。志を得ば命に従いて升り、勢を失えば時と与に墮る^{十五}」と見える。阮籍筆下の「東陵侯」は決まって、高官高位を否定する要素の一つとして現れる。

同じモチーフを用いることによって際立つ両者の乖離は、「擬詠懷詩」の特異性を示しているように思われる。庾信詩は結果として阮籍詩に似ていないのではなく、「擬詠懷詩」における「擬」は、原篇の再現、すなわち語彙、モチーフ、構成を意識的にまねることをただちに意味するものではなかったということである。

宣帝大象元年、五七九年に庾信は職を辞する。このとき、二十巻の家集を編纂している^{十六}。「擬詠懷詩」というタイトルは、作品集が編纂されるとき、すなわち庾信の生前、すでに付けられていたと考えられる^{十七}。しかし、「詠懷詩」に「擬」うと題しているのにも関わらず、同じように阮籍詩を模擬の対象とした鮑照詩とはもとより、

江淹詩とも趣向が異なっている。少し乱暴にいつてしまえば、前者（鮑照、江淹）の模擬は阮籍の作品に似ているのに対し、後者（庾信）のは似ていないのである。それでも、「擬詠懷詩」と名付けたのは、それだけ阮籍の文学が庾信のところに訴えるものがあったためだと想像される^{十八}。

「擬詠懷詩」の特徴を挙げるならば、典故の多さがその一つであろう。とりわけ人物に関するものに突出している。自らの人生について直接言及するのではなく、過去の名士、賢人の出处進退を取り上げ、それらと重ねあわせながら、あるいは対比させながら詠みあげている^{十九}。一覧にすると以下のようなになる。

- ① 阮籍、嵇康、崔駟
- ② 傅悅、呂尚、伊尹、湯王、蘇秦
- ③ 孔子、鄧宇、班超、荆軻、李夫人、晉太子圉
- ④ 鄭子產、陳公子完、黎侯、公子重耳、孔子、張良
- ⑤ 吳起、韓非、楊僕
- ⑥ 豫讓、季布、劉嬰、司馬相如
- ⑦ 精衛
- ⑧ 黥布、光武帝、韓信、虞詡、項羽、衛青
- ⑨ なし
- ⑩ 李陵、荆軻、蘇武
- ⑪ 二妃、杞殖妻、項羽、師曠、張翰
- ⑫ 屈原
- ⑬ 張良
- ⑭ 季孫、周王
- ⑮ 蘇秦、張儀
- ⑯ 阮籍、齊威公
- ⑰ 傅介子、楊僕
- ⑱ 李廣、莊子
- ⑲ 張儀、管仲
- ⑳ 鄭崇、周亞夫、霍去病
- ㉑ 伯夷、叔齊、宋玉、殷仲文
- ㉒ 周勃、王吉、牧子
- ㉓ 黃帝、舜、二妃、曹操、婕妤
- ㉔ 東陵侯

②5 (桃花源)、劉尚

②6 蘇武、荊軻、項羽

②7 項羽、苻堅、袁尚、楊璇、臨江王榮

(數は『庾子山集注』に基づく)

よく詠われる人物の一人が項羽である(⑧⑪⑫⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺)。周知のとおり、劉邦と天下を争った豪傑である。最後は劉邦に追い詰められ、自害する。項羽の死は、楚という国の滅亡を意味する。戦いに勝った劉邦は、その後四百年続く漢王朝を開く。史書では、項羽の粗暴で傲慢な一面が取り上げられ、民心を得られなかったところに、滅亡の必然性を見ている^{二一}。しかし庾信詩では、「長坂に初め垂翼し、鴻溝に遂に倒戈す。的顛此に於いて去り、虞よ奈何せん(⑧)」、あるいは「天亡ぼし憤戦に遭い、日蹙りて愁兵に値う(中略)楚歌恨曲に饒く、南風死声多し(⑪)」というように、項羽の没落、楚の滅亡を突き放していない。天時を味方にできなかった悲運の人物として、むしろ気持ちを寄り添わせている。

遠地に遣わされた蘇武、李陵、荊軻(③⑩⑫⑭)、遊説の士として活躍した蘇秦、張儀(②⑤⑥⑨⑲⑳)の生き方も、作品の中においてしばしばふり返られている。故郷を離れ異国に赴き、ひいてはそこに骨を埋めることとなった人物に関心を寄せていることが見て取れる。

祖国である梁が不条理にも滅びてしまったこと、そして激動の時代に翻弄され生きることの意義を、歴史上の人物を引き合いに、繰り返してここに問いつけているのである。庾信の阮籍「詠懷詩」に対する模擬もまた、乱世という時代に囚われた一人の文人の嘆きを吐露する場に他ならない。

おわりに

模擬とは、まねることである。「まねる」とはひと言でいっても、そのあり方は必ずしも一様ではない。梅家玲氏は、「漢魏以来の擬代の作は、「純擬作」「純代言」あるいは「擬作、代言の両方を兼ねるもの」、まさにこの三種類に分けられる。この三種類が基本となり、互い影響しあいながらいささかの変化を見せる」と述べる^{二二}。

『文選』に「雜擬」という部立てがある。ここに収められている作品からでもこのことが窺われる。謝靈運「魏の太子の鄴中集の詩に擬う八首」及び江淹「雜体三十首」

の序文を見てみよう。

「魏の太子の鄴中集の詩に擬う八首」の序文に「建安の末、余時に鄴宮に在り、朝に遊び夕に讌し、歡愉の極を究む。天下の良辰、美景、賞心、樂事、四者并せ難し。今昆弟友朋、二三の諸彦、共に之を尽く。(中略)歲月流るるが如く、零落して將に尽きんとす。文を撰し人を懷う、往に感じて愴増す」と見える。鄴中の頃、歡樂を尽くし、心のゆくままに過ごした日々を懷かしみ、ともにいた人の多くが世を去り、懷旧の情に動かされて、作品を綴ることにしたことが述べられている。序文は、建安末、文壇の中心である曹丕(魏の太子)の口調並びに彼が身を置いたと思われる環境に仮託して書かれたものである。梅氏のいうところの「(純)代言」と分類にされるものである。八首の作品も、それぞれ曹丕、王粲、陳琳、徐幹、劉楨、應瑒、阮瑀、曹植に成り代わって詠まれている。「魏の太子の鄴中集の詩に擬う八首」におけるおおよそ「擬」の意味するところである。

「雑体三十首」の序文では、五言詩の制作が盛んになり、作品が多く生み出されたことに言及した上で、「今三十首の詩を作り、其の文体に敦う。淵流を品藻するに足らずと雖も、亦た商榷しょうかくに乖そむくこと無きに庶ちかからんか」と述べる。「效阮公詩十五首」と同じ江淹の手による模擬である。序文に従えば、ここでは蓄積された五言詩をテーマごとに整理し、そのテーマ(文体)の再現を「敦(擬)」と呼んでいる^{三十二}。梅氏のいうところの「(純)擬作」になろう。

「(純)代言」すなわち作者に対する模擬、「(純)擬作」すなわち作品内容に対する模擬、あるいはこの両方の性格を帯びるもの、この三つはいずれも対象に合わせての創作である点において共通する。「效阮公詩」「擬詠懷詩」における「效」「擬」はこうした模擬のあり方からは隔たつているといえよう。

魏から晋へ政權交代が巧妙に推し進められる中、余儀なく時代の流れに巻き込まれていった文人として、まず阮籍が挙げられる。乱世と向き合い、その感慨、慨嘆を詠出したのが「詠懷詩」であると後世において受け止められてきた。阮籍詩に対する江淹、庾信が模擬において受容したのはむしろこのような阮籍文学のあり方である。

庾信は、祖国の滅亡に遭い、晩年、異郷の北周で過ごす他なかった。歴史に翻弄され、思い通りに生きられなかった自らの人生、また祖国の運命をふり返った作品群に「擬詠懷詩」と名付けた。江淹の「效阮公詩」もまた、仕えていた君主が謀反を計画していた最中に詠まれている。主君に向けた戒めのメッセージであるとともに、緊迫した時代における一人の表現者としての感慨、慨嘆を詠出した作品となっている。

ともに阮籍詩を模擬の対象として取り上げ、完成された模擬作はいわゆる模擬の規範から逸脱したものである。そして、作者自身の境遇・胸懷を写している点において

特徴が重なる。阮籍の文学が激動の時代に生きる苦悩を表現する場として展開していたことが両方の模擬のあり方によって示される。

江淹、庾信が模擬を通して受容したのは、阮籍詩が生み出されるその時、その場、すなわち阮籍の文学営為そのものだったということになる。

一 興膳宏氏『庾信』（集英社、一九八三年）の巻末に付された庾信の年譜では、五七八年（庾信が六十六歳）の作としている。

二 『南史』江淹傳に「淹少孤貧、常慕司馬長卿、梁伯鸞之為人、不事章句之學、留情於文章。早為高平檀超所知、常升以上席、甚加禮焉」とある。

三 （原文）『詩品』卷中「文通詩體總雜。善於摹擬。筋力於王微。成就於謝朓。初。淹罷宣城郡。遂宿野寺。夢一美丈夫。自稱郭璞。謂淹曰。吾有筆。在卿處多年矣。可以見還。淹探懷中。得五色筆。以授之。爾後為詩。不復成語。故世傳江淹才盡」。

四 杜甫「戯れに六絶句を為る」『杜詩詳注』「庾信文章老更成、凌雲健筆意縱橫。今人嗤點流傳賦、不覺前賢畏後生」とある。

五 文集の編纂について、『梁書』江淹伝に「凡所著述百余篇、自撰為前後集」江淹「自序」『江文通集彙注』卷十）に「自少及長、未嘗著書、惟集十卷、謂如此足矣」とある。江淹の作品の引用は以降、明・胡之驥註『江文通集彙注』に拠る。

六 「被黜為吳興令辭牋詣建平王」（『江文通集彙注』卷九）に「竊恩伏阜九載、齒錄八年、以春以秋、且思且顧、竟不能抑黑質」と見える。建平王に出仕したのは泰始二年（四六六）のこと。本文に見える「九載」に従えば、左遷されたのは、四七四年になる。このたびの左遷に対し、史書にもう一つの原因が記載されている。江淹が自身を司馬に登用するようしつこく上表したためだという。

七 『江文通集彙注』に収められている楽府の作品を除く、詩及び拾遺は全一〇二首ある。タイトル及び自注に模擬の作と見えるものはおよそ半分の四十六首である。「效阮公詩」十五首、「雜体詩」三十首、「学魏文帝」一首である。

八 （原文）『滄浪詩話』詩評「擬古惟江文通最長、擬淵明似淵明、擬康樂似康樂、擬左思似左思、擬郭璞似郭璞、獨擬李都尉一首、不似西漢耳。」

九 『論語』子罕篇「子曰、歲寒、然後知松柏之後彫也。」正義に「此章喻君子也。大寒之歲、衆木皆死、然後知松柏小彫傷若平歲。則衆木亦有不死者、故須歲寒而後別之」と、寒さで樹木が凋落してのち、顕れる松柏の生命力に、君子のあり方を擬えている。

十 江淹にとって文学を作ることは、主君に自らの思いを伝える仲立ちのような役割を演じてきた。「建平王に詣りて上書す」『江文通集彙注』卷九、『文選』卷三十九）がそれの代表である。建平王とは、劉景素のこと。ここでは、罪の疑いをかけられ、囚われた

が、右の文章を読んだ劉景素がひどく感心し、即日釈放されたという。のち同じ劉景素に向け作成された「效阮公詩」もこうした役割が受け継がれているということになる。

十二 「哀江南賦」の序文に「大盜移國、金陵瓦解。余乃竄身荒谷、公私塗炭、華陽奔命、有去無歸」とある。

十三 『莊子』外物篇「周昨來、有中道而呼者。周顧視車轍中、有鮒魚焉。周問之曰、鮒魚來、子何為者邪。對曰、我、東海之波臣也。君豈有斗升之水而活我哉。周曰、諾。我且南遊吳、越之王、激西江之水而迎子、可乎。鮒魚忿然作色曰、吾失我常與、我無所處。吾得斗升之水然活耳、君乃言此、曾不如早索我於枯魚之肆。」『戰國策』「其飛徐而鳴悲。飛徐者、故瘡痛也。鳴悲者、久失群也、故瘡未息、而驚心未至也。聞弦音、引而高飛、故瘡隕也其。」

十四 『後漢書』崔駰列伝「憲擅權驕恣、駰數諫之。（中略）憲不能容、稍疎之、因察駰高第、出爲長岑長。駰自以遠去、不得意、遂不之官而歸。」

十五 『史記』蕭相國世家「秦破、爲布衣、貧、種瓜於長安城東、瓜美、故世俗謂之東陵瓜、從召平以爲名也。」

十六 （原文）「召平封東陵。一旦爲布衣。枝葉托根柢。死生同盛衰。得志從命升。失勢與時隕」（『阮籍集校注』）

十七 仲のよかった太子滕王（滕王暹）が彼の作品に序文を付けている。その「庾信集序」に「春秋六十有七。齒雖耆舊」とあり、庾信が六十七歳のとき、文集が編纂されたことがわかる。

十八 全二十巻の『庾信集』は既に散逸している。早期の類書『芸文類聚』『初学記』『文苑英華』に庾信の作品が散見される。

十九 安藤信広氏『庾信と六朝文学』（創文社、二〇〇八年）の中に、「擬」と「詠懐」の方法」という一章が立てられている。氏は、「擬」と「詠懐」をそれぞれを分け考察し、次のように述べる。「庾信にとつて“擬詠懐”という行為は、阮籍を意識しつつ、現実の具体性、及び現実との関係の具体性を捨象した文学の世界に自己の本質を展開しようとする行為だった」という。また「擬」を、阮籍詩をいったん呼び出すマークであると解する。本論では、庾信の模倣作に現れた特質から見出される阮籍詩の受容のあり方に主眼を置く。

二十 大上正美氏はその論著『六朝文学が要請する視座』（研文出版、二〇一二年）「擬詠懐詩」に見る方法としての自虐」（初出、「庾信論覚え書き」（二）——「擬詠懐詩」の方法について）、青山学院大学文学部「紀要」第五二、二〇一〇年）において、庾信「擬詠懐詩」について、歴史上の人物を挙げ、それらの生き方との距離を示すことで、自らの生の無念さを際立たせているという。氏は、それを「自虐を方法としている」として理解する。

二十一 『史記』項羽本紀「太史公曰、（中略）自矜功伐、奮其私智而不師古、謂霸王之業、欲以力征經營天下、五年卒亡其國、身死東城、尚不覺寤而不自責個、過矣。乃引、天亡

我、非用兵之罪也。豈不謬哉。」

二十一 『汉魏六朝文学新论——拟代と贈答篇』（北京大学出版社、二〇〇四年初版、二〇〇六年版）「考诸汉魏以来的拟代之作，“纯拟作”、“纯代言”、“兼具拟代、代言双重性质”、正是其三种最基本的作品类型；以此三类为宗、复又若干交糅错综之变化。」

二十二 謝靈運 「擬魏太子鄴中集詩八首」及び江淹 「雜體三十首」における模擬について、和田英信氏「模擬と創造——六朝模擬詩小考」（『集刊東洋学』一〇〇、二〇〇八年、のち『中国古典文学の思考様式』（研文出版、二〇一二年）に収め入れられる）を参照されたい。